

学校法人 村上学園



二〇二〇年（令和二年）九月一四日発行
発行元（発行責任者）
学校法人村上学園 法人事務局
参事（広報担当） 寺川 誠
東大阪市西堤学園町三二一
電話 〇六六七八一二四四四
URL <https://www.murakamigakuen.jp/>



学園のシンボルの鹿(9/3撮影)

☆紙面案内

- 1面：第2学期スタート
附属幼稚園……「夏の集い」開催
- 2面：私の英語教育
- 3面：アリオ寮、間もなく着工
（外観パースと模型届く）
- 4面：Murakamigakuen Art-Gallery
：編集後記

短い夏休みが終わり

第二学期がスタートしました

観測史上最高の気温四一・一℃を記録した浜松市。全国各地で三五℃を超える酷暑が続く、コロナ感染防止のためのマスクの着用が、熱中症を引き起こしかねない状況となっている昨今です。新型コロナウイルスについても、一時期感染者が少なくなっていたものの、七月中旬以降全国的に若者を中心に感染が急速に拡大し、第二波到来を印象付ける様相を映し出しています。幸いなことに重症者数及び死者数は、従前より少ないものの、予断を許さない状況となっています。新型コロナウイルス感染リスクを低減し、「感染しない」「感染させない」ための努力は必要です。クラスターの発生しやすい学校環境にあつては、手洗い、消毒、マスク着用等、最善の配慮留意が必要です。現在のところ学園関係者でコロナウィルス感染者との濃厚接触者はいるものの感染者はいない状況です。学園関係の皆様には、日々の対応は大変な心遣いが必要だと思いますが、十分な上にも十分な配慮をお願いいたします。

一方、大学・同短期大学部では、新型コロナウイルス感染防止のための対策を講じながら、八月十七日（月）～二十（金）の間、教員免許更新講習が開催されました。早朝より夕刻まで、幼稚園・高等学校で教鞭をとっている多数の先生方が受講されていました。

本学園高等学校等の当面の授業等の予定は次のとおりです。

【東大阪大学敬愛高等学校】

八月十七日（月） 始業式
八月十八日（火）～二十（金）午前中三限授業
八月二十三日（日） オープンスクール
八月二十四日（月） 通常授業

【東大阪大学柏原高等学校】

八月十七日（月） 始業式

八月二十八日「長」の各組毎に分散した（金）、東大阪大形での開催です。

学附属幼稚園では、「夏の集い」を行いました。コロナ渦のリスクを減らすため「年少」「年中」「年長」の各組毎に分散した（金）、東大阪大形での開催です。保護者の方が見守る中、歌を歌い、踊りを踊り、これまでの練習の成果を見てもらいました。その後は、保護者とともに縁日遊びを楽しみました。



アイスクリーム

一〇月になれば、運動会があります。コロナ感染予防対策も重要ではありますが、暑さ対策も忘れることなく園行事を開催してまいります。ご理解とご支援をお願いいたします。

東大阪大学附属幼稚園

「夏の集い」を行いました(8/28)



↑ 写真上下：年少組 踊り
↓ 「すみっコぐらし温度」



「光うちわ」や冷たい「アイス」をもらい、次いでブルーシートの海で泳ぐ魚たちを釣りあげ、短い時間ではありましたが、保護



保護者とともに魚釣りを楽しみました
(ブルーシートの海に泳ぐ魚たちを上手に釣り上げていました)

先生が真剣になり人間としての自主性を生徒に訴えていくこと要求やねがい、これこそ生徒を鍛えていく温かくて厳しい原点だと思えます。

「あんしん」のたわごと

「生徒とのほんとうの人間関係づくり(民主的関係)」ということは、先生からの願いや訴え、要求を止めて、生徒の言い分に従うことではないのであります。私たちの教育という仕事に民主性を与えるのは、相手の人間的自立への信頼と尊敬を心から持ち、大事にしたいため、今、敬愛高校生としてできる最大限のことを訴え、要求していく生徒と先生の関係であります。少々の学力の低い生徒や腕白な生徒もいます。しかし、それらの生徒ながらに持っている限りない可能性を信じるがため、信頼と尊敬が強いれば強いほど、より高く「要求」「訴え」を差し出すことのできる人、それは先生であり、教師という専門家しかできないのであります。

私の言う「要求」「訴え」とは、生徒の心の中に向かって、先生の一番の願いをとことん訴えかけていくことでもあります。時には、多くのことばで説得することもありましょう。また、時には短く一言で分らせることもありましょう。いずれにしても、その時の教育的内容や生徒たちの心の動きや行動に心懸けて、「今、みんなは先生といっしょに、何をしているのだ。何を求めるのだ」を訴えかけていくこと。これが先生の要求なのであります。

学校は、このような生徒への働きかけによって、生徒たちが自主的に教育文化(学力・体力・情操・生活技能)を我がものとし、友だちの中で生きていくため(社会性)の人間としての価値を発見していく場であればならないと確信しております。一言でまとめますと、仲間づくり(友人関係)の中で、一人ひとりが自立していくよう促すということ(生活の組織化)が、学校というところの役割・仕事であります。

もう高校生であります。生活組織化がほぼできます。ですから、いつも先生側からの指導ばかりでなく、生徒自身がクラスの仲間づくり(集団化)に取り組めると思います。常に「みんなで作ったら楽しかった」「しんどかったが力を合わせたからできた」「やっぱり友だちがいるから高校はすばらしい」「敬愛高校は素晴らしい」等々、高校生としての成功・成就感(発展の基盤)を、クラスの中で一人ひとりが味わった時、仲間づくり(自主的連帯)が本物になると思います。生徒の自主性とか主体性とかいうものは、こんなものから生まれると信じます。

(故岡崎安伸先生の遺稿より)

昨今の社会情勢の中、東大阪大学敬愛高等学校、東大阪大学柏原高等学校におきましては、八月十七日（月）から、第二学期が始まりました。東大阪大学附属幼稚園では一週間遅れて、八月二十四日（月）から二学期が始まります。生徒たちにとって、例年なら六週間程の長期の休みがあったはずですが、今年は新型コロナウイルスの蔓延による緊急事態宣言の発出で、人の移動の自粛や事業所等の休業要請があり、学校も休業措置を講じたことにより、授業時数を確保し、学力向上に取り組む必要があり、一週間余りの短い夏休みになりました。生徒たちにとっては厳しい状況にはなりますが、頑張っしてほしいと思います。例年になく特別な夏、短い夏休み（一週間余り）を過ごした生徒たちは、今、元気に登校して

今号から、各所属の教育内容に関する記事を重点的に取り上げることに、村上学園及び設置されている各所属への理解をより深めていただけるようにしたいと思います。取り上げる内容は、学校として取り組んでいる教育実践や教員が授業の中で実践している内容を取り上げます。在籍教職員からの寄稿で構成しますので、ご期待いただきたいと思います。



学園在籍教員の皆様には、各人の教育実践を披露しあうことにより、各人の

実践事例 「私の英語教育」

東大阪大学柏原高等学校 森山武哲 先生

指導法の改善し、村上学園に集う全ての園児生徒学生の皆さんが、今、必要とされる力を身に付け社会に羽ばたいていける力を培うことにつながっていくと思

* 寄稿は以下のアドレスにメールで。

寄稿先：terakawa.makoto@gmail.com



次は、貴方の番（寄稿）です。

【はじめに】

私は、今年度末で教員歴三〇年になります。その内の二四年間を、講師として一〇数校の公立中学校で勤務してきました。私の英語科教員としての技量の大半は、そこで育まれ磨かれたものであるといえます。最初の公立中学校では、クラブと生活指導で授業研究にはほとんど時間を割くことがままならず、英語の授業は、すべて自分のペースで手前勝手な教鞭をふるっていたように思います。今思えば、本当に申し訳ない授業をしていたと思います。そんな私が、今回、縁がありこの文章（私と英語教育）を書くことになりました。どのような変遷、成長を遂げてきたかを読んで頂き、少しでも共感して頂ければ幸いです。

【恐るべし、私を変えた二つの事例】

一つ目です。

五年目に着任した二校目でのことです。突然、「A先生の社会はわかりやすかったし、好きになった。森山先生も面白かったけれど、英語はあんまり分かんかったわあ。」この言葉は、卒業生が何気なく言い放ったものでしたが、私は、それを聞いた瞬間、あまりの衝撃に思考回路が緊急停止し、正直、笑い飛ばすのが精一杯の状態に陥つことを、今でも覚えています。この一言は、教員としての私の心にグサリと突き刺さり、その後しばらくの間、この傷が癒えることはありませんでした。むしろ、折に触れ思い出す度に、より深く突き刺さり、「こんな授業内容で良いのか？」と自問自答せざるおえなくなっていました。

その社会科のA先生は、私より三歳若かったのですが、正直、授業力で一本とられたと思いました。彼の持ち味は、カウンスリングマインドを身に付けていることでした。生徒の意見や気持ちをしっかりと聞くことから始め、生徒のペースを守りながら、授業や物事を進めていく術は、その当時の私には、残念ながらほとんど身についていなくて悔しい限りでした。

二つ目は、もう一人の社会科教員の教科指導です。

授業で「数年連続でリンゴの生産高一位の県は、青森県である。」と言う内容を指導されて

いました。「何故、連続一位なのか？」を生徒たちに問いかけて、様々な解答を話し合わせ、青森県のリンゴ農家に手紙を書かせて交流を深められていました。そして、最後には、その農家から送られてきたその年に収穫されたリンゴを、昼食時に、全員で日本一の味を堪能する所まで指導されていました。何故、一位なのかを改めて問う必要はありません。リンゴを頬張る生徒たちの笑顔が何よりの答えだったのですから。丁寧な指導、また、現在言う「アクティブラーニング」、「課題解決型」、「探求型」の学習を取り入れた授業を見たとき、私自身の教科教授方法

に足らなかったピースの内の一つを発見出来たような気持ちになりました。

【三人寄れば文殊の知恵】

三〇代半ばで勤務した学校では、生徒一人ひとりの力を伸ばす手段として、三人一組のグループワークを取り入れていました。一人の教員が、一斉に三〇人以上の生徒を指導すると、どうしても無意識の内にでも手の平から溢れてしまふ生徒が出てきてしまいます。学習意欲をかき立て、全ての生徒が授業に集中できることを目標とした取り組みでした。更に、教員たちに課せられたのは、学習中の「気づきの瞬間」、「学びの瞬間」を、「どこに」「どのタイミングで」取り入れるかでした。「気づきの瞬間」とは、一人では歯が立たない課題も、三人一組のグループワークで考えることにより、教えたり教えられたりしながら、自分のウィークポイントや課題克服方法がわかる瞬間であり、また、大きい意味では、その教科の楽しさや面白さが、気づき、生徒自身が自ら進んで自学自習に取り組みようになることだと、私は理解しています。

私は研究授業にもトライし、英語科の同僚からはもちろん、他教科の先生からも多くのアドバイスを頂き、研究・実践を続けてきました。

具体的に取り組んだ代表的な方法は、「リスニングゲーム」と言うもので、インプットした単語やフレーズを、様々なリズムに乗ってアウトプットしていくことに重点を置くものです。もう一つは、「寿司回転ゲーム」と言うもので、向かい合った2列が順番にズレていき、次々に多くのパートナーとの会話に挑戦していくものです。このような取り組み中で、気がついたことは、ある一定のルールや方法を生徒たちが理解すれば、後は、生徒たちが作り出す楽しい雰囲気や黙って見守るだけで良いという事でした。輪の中に入り無理に盛り上げる様なことも不要だと言うことです。また、「先生、もっとやろうや！」と声が上がった時は、最高に良い気分になり、生徒たちに「気づきの瞬間」を与えることが出来たと感じられました。そして、この「気づきの瞬間」は、今なお、私の授業の中心的な柱になっています。

【母校、関西外国語大学との出会い】

四〇代前半に、枚方市立の中学校に勤務するところになりました。そこには、私の母校である関西外国語大学が近くにあるためか、特に英語学習に力を注いでいました。私は専用の教室を割り当てて頂き、更に、少人数制の授業を展開できるようにになりました。ここまで授業環境を整えられて、ただ単に五〇分間の講義を繰り返す形態では、周囲が、特に意識の高い生徒たちが納得いかないのは明らかでした。私は「気づきの瞬間」を基礎におき、できる限り四技能を取り入れ、アクティブに授業展開を行いました。授業準備は本当に大変でしたが、今振り返ってみれば良い財産となっています。そして、いよ

いよ運命の出会いをします。

ある時、準備のために教室に入ると、一人のスーツを着た男性がそこに立っていました。「んっ？」と思いながらも素性を尋ねると、関西外国語大学大学院の学生で、「教育実習で数か月お世話になります」とのことでした。「そんなこと聞いてないなあ」と思いつつ、「何故この教室にいるのか？」と尋ねると、「生徒たちが、先生の授業が一番楽しいと言っていたので、見学させて下さい。」と元氣よく答えてくれました。煽てられればすぐ木に登るタイプの私は、迷わず許可を出しました。そして、この日から、彼と最新の英語科教授法や私の指導方法の問題点を話し合う機会を持つようになりました。内容は、私が質問ばかりしていたのですが、その中で、頭の中で描いていた指導方法がハッキリと言葉として具体的に分かったのです。

「先生が実践しようとしている方法は、TPR (Total Physical Response) と言われるもので日本語では『全身反応教授法』と呼ばれているものですよ。」と教えてくれました。それを聞いた時、約二〇年経って私だけの宝箱をようやく見つける事が出来たのと、以前、胸に深く刺さった卒業生の言葉がようやくとれたと感じました。と同時に、ワクワクと胸弾む思いが溢れてきたことを覚えています。

また、何故か分かりませんが、この期間中に、関西外国語大学の教授が私の授業を参観に来られたのです。凄く緊張しましたが、TPRを用いた授業を行い、生徒たちの頑張りにも大いに助けられました。その時は、互いの気持ちを溶かし、コミュニケーションを図る手段のアイスパレイクとして、「サイレント・バースティ・ゲーム」に取り組みました。続いて、「指チューブゲーム」を行いました。これはリスニングに重点を置き、正しく英語の発音や音が聞き取れているかにトライするものでした。参観されていたその教授も、思わず笑い出す展開となりました。授業後、お褒めの言葉を頂き、ますます木に登ってしまいました。

また、院生から貰ったアドバイスとして、「リアクションのスピード感が大切です。実際の会話では、ゆっくり考え話す場面もありますが、やはり、反射的反応のスピード感が必要だと思っています。」と言う内容のものでした。そこで、職員室内を見渡して考えてみると、一人の英語科教員がストップウォッチを使用した授業展開をしていることに気がつき、早速、それを取り入れてみました。すると、授業に急激な変化が起こりました。タイムを競うことによる集中力のアップと雰囲気の高まりが、与えられた課題に何度もトライする自発的学習意欲が見受けられました。また生徒たちの中にストップウォッチを任されたことによってリーダー的存在の者が現れてきたのです。他のメンバーも教員に指示されるより、同じ仲間と促された方が素直に取り組んでいました。私の役目

と云えば、よく観察し、どうしても支援が必要な生徒にアドバイスを与えるだけになっていました。生徒主導で進められる授業内で、私の気配と役目が消えていくことに大いに喜びを感じました。

【東大阪大学柏原高等学校で】

六年前、東大阪大学柏原高等学校に着任しました。そこには、中学校で教鞭をとっていた時の卒業生が在学していました。どの生徒も、中学校の頃より格段に成長し、しっかりと授業に集中して取り組んでいる姿が印象的でした。

そのような中で、ICTを活用した授業を行いました。PCとプロジェクターで画像を使い、関係代名詞の英文を三人一組のグループが作成し発表することを主目的としました。結果、普通授業では最も嫌いな英語も三人で知恵を出し合い、課題解決にはほぼ全員が取り組むことが出来ていました。このように、ICTを活用しグループ学習を取り入れた指導形態を用いるのは、有効な指導方法の一つだと考えます。

八月に、現二年生でストップウォッチを使用し、三人一組のグループで取り組みました。さすがに高校生は飲み込みが早く、中学生より高い次元でのまとまった集中力を発揮していました。いつもは手こずっているはずの単語のインプット・アウトプットも短時間で実践できていました。やはり、ストップウォッチの効果は大いにあったと思います。（三面指導事例参照）



森山先生の授業の様子…指導事例の導入部分「サイレント・バースティ・ゲーム」の実践の二コマ

英語科指導事例 教科及び指導内容：Communication English II（Lesson5 part2 new words）

目 標：new wordsのインプットとアウトプットの活用

	取り組み内容	教員の活動	生徒の活動	指導のポイント
導 入	サイレント・バースデー・ゲーム	指示英語はAll Englishを目指す。必要に合わせてゼスチャーを用いる。	音声なしに、ゼスチャーを用いて取り組む。	“Don't use English and Japanese.”を守ることを促す。
		席順が決まった後、チームを分けるため、1～4を英語で発話させる。	同じナンバーのグループになり、“C”の形を作り着席。	出席番号の様な固定されたもので、グループを作らない。コミュニケーションの深まりを探る。
展 開	リズムゲーム	L5-2のNew Words(9コ)の発音後、暗記を指示。	リピート後、5コを暗記することにに取り組む。	正しく発音されているかを確認、暗記時間も様子をみながら制限を加える。
		ルールとリズムに合わせて、全ての単語を扱えるようになることを指示。 5→7→9コと徐々に単語を増やしていく。	メンバーと話し合いながら、課題達成を目指す。	発音や暗記が苦手な生徒のフォローをする。また、メンバー間でのフォローも促す。
		ストップウォッチを使用し、タイムトライアルと競争心を促す。	メンバーと話し合いながら、課題達成を目指す。	自然と形成されるリーダーシップに注視し、メンバーのまとまりに役立てる。
		グループ対戦でタイムを計る。	1位を目指して取り組む	場合によっては、教員が時計係をする。ルールとリズムが正しいかを判定する。
まとめ	ポイント整理	インプットとアウトプットの重点ポイントについて説明。	理解を深め、各自で取り組める様に努力を続ける。	各自の自信につながる様に話をする。

「これなら目指す！」

「OCR」と「TPR」の融合が、これからの私の課題です。しかし、あくまでも生徒の学習意欲を高める事が主課題であり、教育機器の操作だけになりがちな事も心配です。少なくとも各単元の計画を綿密に立て、「気づきの瞬間」を授業の支柱に置き、カウンセリングマインドと現実主義を



森山先生の授業の様子：指導事例の展開部（リズムゲーム）実践の一コマ

忘れず、様々な方法で融合させ、「英語って、おもしろいなあ」と気づき、「海外に行ってみたйнаあ」と目標を立ててくれる人材の育成が私の目標です。

＊文中の「リズムゲーム」「寿司回転ゲーム」「サイレントバースデーゲーム」「指チューブゲーム」等の名称は、筆者の命名

＊TPR：正式名称「Total Physical Response」（全身反応教授法）、1960年代にアメリカの心理学者であるジェームス・アッシャーによって提唱された指導法。

生徒に指導者の指示を英語で聞かせて、それに動作（もしくは言葉）で反応してもらうという方法。生徒に立つ（もしくは立つ）「Stand up」と言い、歩いてほ（もしくは歩く）「Walk around」や、日本語を使わずに指示する。英語に直接動作で反応する指導法です。TPRの利点は発話が強要されないで、聴くことに集中できることや入門期や話し言葉が苦手な場合に適切です。TPRと組み合わせ、例えば、物の形を当てる、ストーリーテリング等、工夫次第で楽しい授業が可能です。問題点といえは動作を使って導入できる表現に限界があるので、抽象的な描写や会話表現などに少し不向きです。

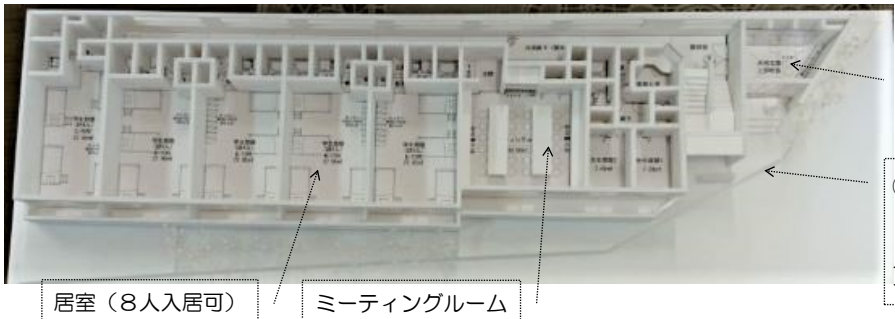
「アスリート寮」の模型と外観パースが届きました 間もなく着工！（東大阪大学柏原高等学校）



② アスリート寮建設予定地：手前の道路は国道170号線（外環状線）
右方向 北（柏原高校） 左方向 南（大和川）



①：アスリート寮の外観パース（パースのような色合いになる予定です）



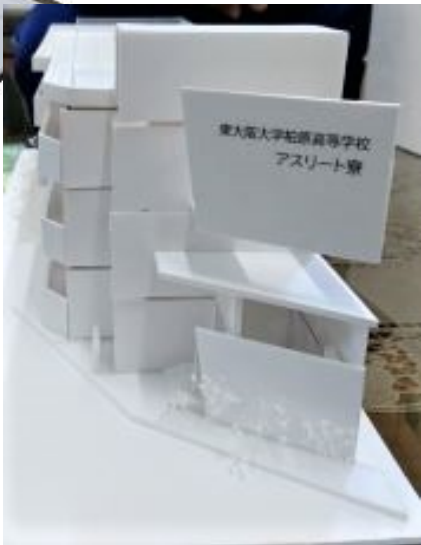
居室（8人入居可） ミーティングルーム



エントランス

③：アスリート寮の模型（1階部の間取）
各階ごとに分割することができ、間取りも設計図通りに作られています。

③：アスリート寮の模型（南東方向から）
新寮の形が良く分かります。各階ごとに分割することができ、間取りも設計図通りに作られています。



③：アスリート寮のエントランス（東面）

来春、竣工予定の「アスリート寮」の完成予想の外観を描いたパースと寮の立体模型が、建設及び管理会社である（株）キンキマネシメント、（株）スカイホームより届きました。

建設予定地は、東大阪大学柏原高等学校より国道一七〇号線（外環状線）に沿って約二五〇m南に行った交差点北西の角地（写真②参照）になります。学校にも近く（現在の敬愛寮と同程度の距離）、絶好の立地です。

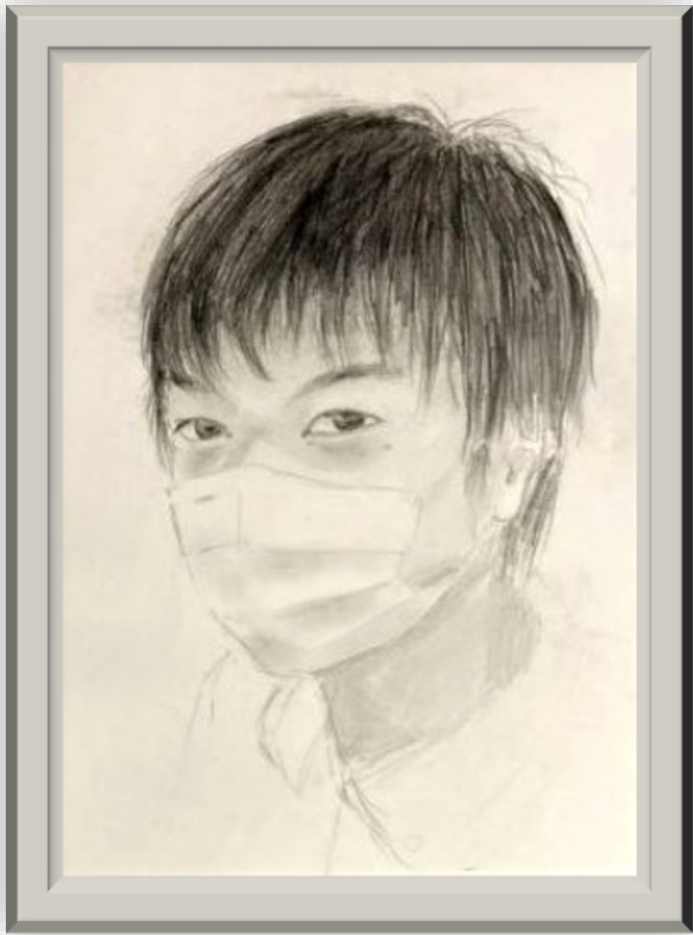
パース（写真①参照）を見ると寮の色調は白っぽいグレーを基調にベランダやエントランス、階段室等の壁面を黒っぽくアクセントとして映えるモノトーンの落ち着いた色合いになっています。

また、寮の模型（写真③参照）は、色彩は施されていませんが、パースでは分からないところ（各部屋の間仕切り、エントランスの配置・吹き抜け、階段等）が、精密に作りこまれ、各階も分割することで部屋の状況が分かるようになっていきます。

新寮の建設ですが、建築のための手続きが少々遅れており、当初九月中旬着工予定でしたが、一カ月ほど遅れ、十月中旬になりそうです。しかし、遅くとも二月には竣工し、三月入居、四月には新入生を迎え、新しい寮で新しい年度を迎えられそうです。入寮を希望している生徒の皆さん、期待してください。

Murakamigakuen Art Gallery (9)

東大阪大学柏原高等学校 美術コース生徒作品



村上学園アートギャラリー(9)は、東大阪大学柏原高等学校美術コースの生徒作品を取り上げました。入学して以来一年間、美術コースで美術系の学習をしてきましたが、新型コロナウイルス蔓延により、三月以来五月中旬までの間、ほとんど登校することなく、在宅での学習を余儀なくされてしまいました。この間、東大阪大学柏原高等学校では、学習課題配付だけでなく動画による授業配信に取り組みました。

今回、掲載させていただいてますのは、動画配信により出題された課題に対し、第二学年

美術コースの生徒たちが制作した作品の一部です。

課題は、「カードゲームのための数字とオリジナルイラスト」及び「自画像」でした。

これまで、本欄に美術コース生の作品を多数紹介してきました。それら過去の作品と比較し、作品の完成度等をおおし、一年間の成長の軌跡を見ていただくことも意味あるものではないでしょうか。

これからも、生徒たちの成長を見守りたいと思います。



後川晴太



仲 健太



川村柔京



橋本朱飛

本田翔大



★編集後記

秋分の日が近づいてくると、朝晩が少しずつ涼しくなってきたのを感じます。

さて、今号ですが、新しい企画として、学園に在籍する教職員の実践事例を紹介する記事の掲載を始めました。学園には幼稚園から大学まで約二五〇名の教員が在籍しています。一人ひとりの教員は、日々園児・生徒・学生と向き合い、指導法や教材の研究を行う中で、真剣に指導しています。しかし、所属が違えば、交流する機会も少なく、せっかくの良い実践が、学園内で広がらず、学園財産の大きな損失につながります。今回の掲載企画が、学園内の連携した研究実践につながることを期待します。

(編集者 寺川誠)

今回は、東大阪大学柏原



<https://murakamigakuen.jp/>